



茶之書

14
2478
269



門 14
2478
卷 269



茶記



茶は唐土天竺にも用ゝは既に神農の食經に於て
事陸羽の茶經宋西の喫茶養生記に於て詳し
る養生の仙藥延齡の妙術なり唐土にも貴重に
爾来周漢晋唐宋元明の間張孟湯陶弘景乃徒
是哉賞美し陸羽盧仝事々嗜愛に次ぎ劉禹錫
白居易范希文司馬光王安石朱熹林希逸文徵明の徒
詩賦に賞し其功能者陸羽の茶經全書宋五卷
生記に詳なり日本紀小人皇五十二代嵯峨帝弘仁六年

江州滋賀へ行幸有し時宗福寺に大僧都永忠み川より茶を
賣してこもりて有し時より未日ある茶行ありて唐茶
斗あり其後人皇七十九代六條院仁安の頃建仁寺の荆祖葉
上僧正千光國師榮西とありて宋より茶を種とてて後鳥
羽院文治より歸朝し筑前國脊振山より植てて夫より
明より人治の梅尾も移して作る所の茶を又宋渡宋の詩

幸得梅尾信 始嘗日本茶

如斯き言美の詩を然しよりて後宇治の里人に給ひて又
仁和寺葉室醍醐大和の室生伊賀れ服部伊勢の川上

後乃清光武茂の河越も移して作るも梅尾宇治を
いへと品とて日ある茶を植作り始より實政も
まると九百有餘歳も及り

茶湯の式權監筋の後土御門院文明の頃南都移る寺に
朱玠酬恩庵一休和尚も参禪しよりて教外乃昔は悟り
円悟禪師の墨跡よりて法信も紹りしとて尤も
愈々喜み供へて圍爐裏に湯を煮てて明友を
招き族れ交りて後其後東山慈照院殿茶道も好給
ひ式禮御定有夫より武埜治鷗孫より利休も宗匠

の名をくみりぬるにむかひて貴族一統流布し
ハ衆人の志す所也余は是を累し傳る

三種茶之記

鷺之画一軸 宋徐熙筆

外題 白鷺綠藻之図 徐熙筆

右 絳阿弥筆

表具 上下茶色北絹中風帯棕實色鈍子紋

宝蓋一文字無之表具一文字抜是ヨリ初ル

箱杓木地 珠光手作 箱覆二重蔓之金襴

外箱 真塗

右覆外箱

小堀遠在公寄附

表具一文字
每手蓋解

踏馬之記

湖山夢伴子書

四方盆

羽田忠昂作

羽田盆下云

松屋有衝茶入

寸法

高サ 二寸七歩
胴ヨリ 一寸二歩

口高寸法

大サ 一寸六歩

蓋

細川三齋云厨好

曳象

大雪吹簾重作

皮袋

唐物

外箱

相木地

右

細川三齋云寄附

袋

龍爪鉢子 古来あり

梅鉢鉢子

古田織部云寄附

木綿カトラウ

千利休云寄附

唐イ鉢子

少堰遠云云寄附

存星長盆

法成盆云云

園山水許由

下繪馬

麟

草子先生云此盆云云一書年寫

一室草用托清趣新 写危苔

疎絶風 芝草休 爐石白踏 卷

物熟時 月 佳 亥 詩 乞 人

右是草室

白雲若去 詩乞人

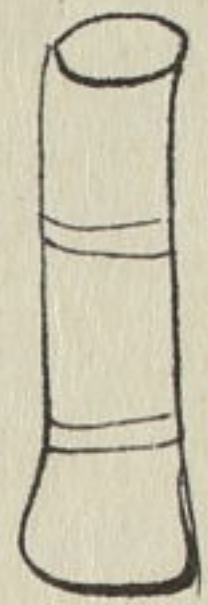
田

田

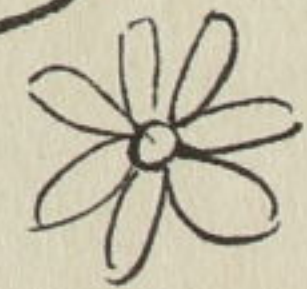
趙列云喫茶去

蘇承金江名物又

妙赤店堂寶云内



花生



滿堂

店表

水指

如地云

天下
長云

月什物太閣秀雲文盤

田

心

少々々々々々々々

たてさせそゆる

まじり

十八日

心

妙赤店

茶歌

盧令

日高丈五膳正濃軍將扣門驚周公傳諫

議送書信。白絹斜封三道印。開緘宛見
誅議面。首閱月團三百片。聞道新年入山裡。
蟄虫驚動春風起。天子須嘗陽羨茶。百草
不敢先開卷。仁風暗結珠蒼苗。先春抽出
黃尖芽。摘鮮焙芳旋封裹。至精至好果
未有。至香至潔之餘合至公。何事便到山人家。柴門
反闕無俗客。紗帽籠頭自煎喫。碧雲引
風吹不斷。白老浮光凝碗面。一碗喉吻潤。二
碗破孤悶。三碗搜枯腸。惟有文字五千卷。

四碗發輕汗。平生不平處。盡向毛孔散。
五碗肌骨清。六碗通仙靈。七碗喫不得。
也唯覺兩腋習習清風生。蓬萊山在何
處。玉川子乘此清風欲歸去。山上羣
僊司下土。地位清高陽風雨。安得知
百萬億蒼生。命墮顛崖受辛苦。使
從諫議問蒼生。到頭合得蘇息否。

茶の用之事 口傳書不_レ定事

一 刀掛 柱幅八_分 子六_分 上長三尺一寸 下長二尺四寸

上五_分 下四_分 上_ツ一寸五分 下_ツ四_分 二_分 石ヨリ 棚上_ハ二_分五_分二_分寸

一 角棚 棚上下 ● 上_ハ上_ハ下_ハ下_ハ二_分寸 七_分九_分寸

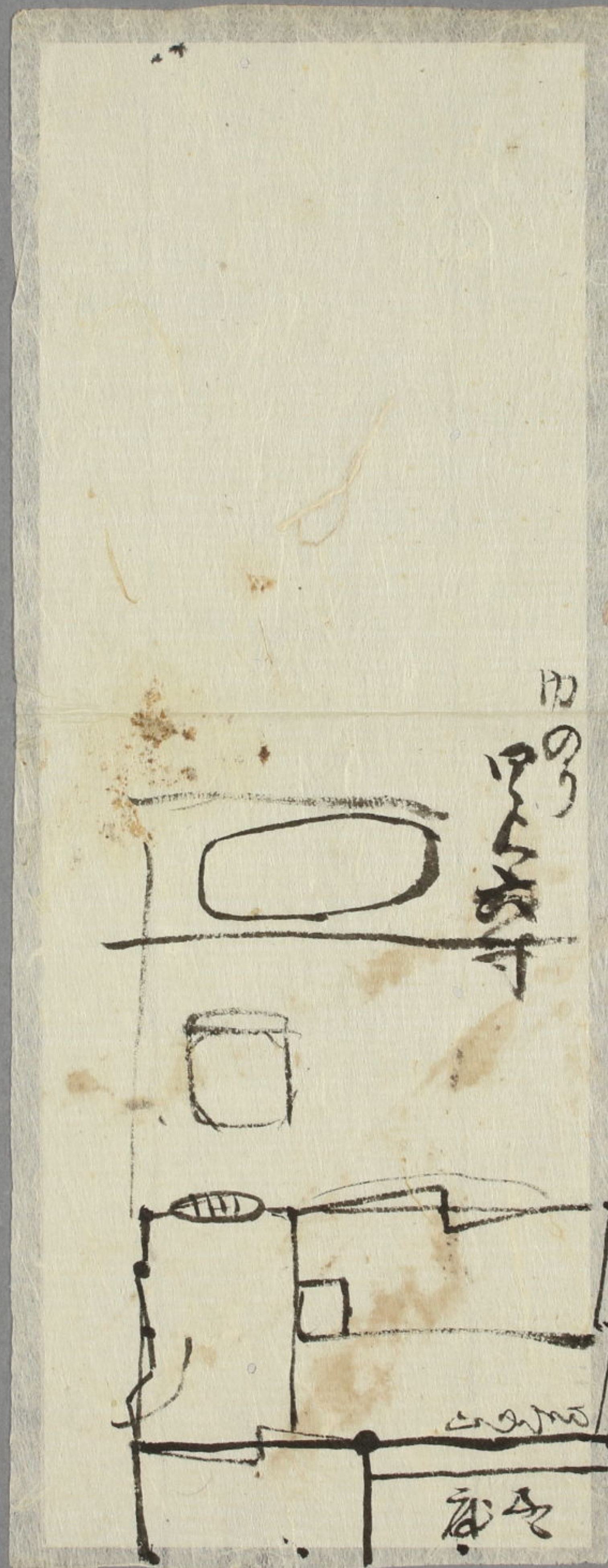
上_ハ棚長サを二人四寸五分_ハ分_ハも三人四_分ありと思_ハす
下_ハ棚長_ハ一尺六_分寸_ハも八寸八_分寸_ハも、三_分寸_ハも

一 杖 女二人守 上幅五寸五分 厚サ 七_分寸_ハ方_ハ也

下幅二寸五分 ありさ五分 上より次第に之を長く作_ル

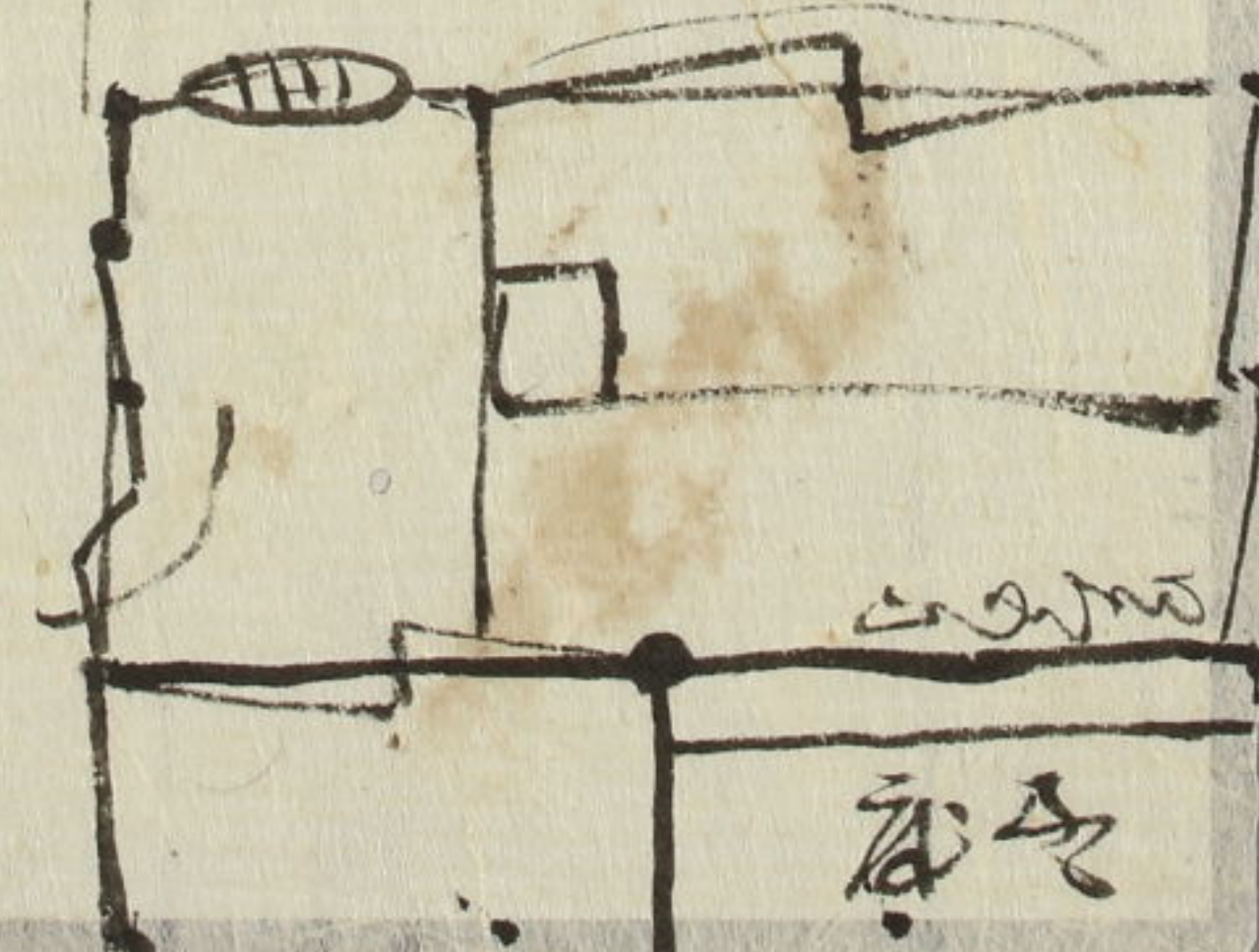
一 虎口ハいろ 紐仕口ニ用_ク

茶守口ハいろ 下口 仇_ハ尺二_分寸_ハも 割_ハ衣_ハ也_ハれ_ハを_レ作_ル
茶守口ハいろ 茶守口ハいろ 茶守口ハいろ



100

100
100
100
100



100

100

一 窓柱のむす方

小房申より窓を成りて場がめりそのうに
そと四寸五寸はみをはりる

柱の天井とありし

下吹ねのうす 袋敷の釘の柱の内方吹ねのうす

大目棚上

棚のり

葺口より四尺九寸半 通口より四尺七寸半

窓掛障子の多い外につりし 着けむるを雨さむ

ゆに掛し

窓より雨障戸二つともあり

出入口二枚障子何れも用じのねいふにわの縁を

ニおぬせまよ上くとおぬのうたえもたえもあけり

ねえ方のと上へ尺じしはどののり下あまの柱のわい

いさりけ中のあけりういよのぬをぬの方へ任

一 掛物 ぬすりういよのぬをぬのぬ

け物にうりぬりある床の上へおぬを床に

こしよせぬし 全テまゐるものぬのぬに

床のうす時釘よりういよのり大井のぬりぬら

床のぬりけけのぬでに竹もは有りぬら

一 窓のぬのり大板の先あつさうぶ橋をぬら

二寸の二寸半

一 窓のぬのり大板の先あつさうぶ橋をぬら

角に若の字の下のみはさしよるの中なり
一板に凡そあまのま中うらとらう足のはたと板のま中
とらふが凡そあまのま中うらとらう足のはたと板のま中

一柳物打くご本に行るうりに分す四方むしはのさ

印小口あまのま中うらとらう足のはたと板のま中
一さうあまのま中うらとらう足のはたと板のま中
一そ方甲け
一あまのま中うらとらう足のはたと板のま中
一あまのま中うらとらう足のはたと板のま中
一あまのま中うらとらう足のはたと板のま中

舟

舟のうらとらう

舟のうらとらう

あまのま中うらとらう足のはたと板のま中

あまのま中うらとらう足のはたと板のま中

あまのま中うらとらう足のはたと板のま中

あまのま中うらとらう足のはたと板のま中

あまのま中うらとらう足のはたと板のま中

あまのま中うらとらう足のはたと板のま中

あまのま中うらとらう足のはたと板のま中

あまのま中うらとらう足のはたと板のま中

あまのま中うらとらう足のはたと板のま中

あまのま中うらとらう足のはたと板のま中

あまのま中うらとらう足のはたと板のま中

あまのま中うらとらう足のはたと板のま中

鶴の雛を珍味の天竺も白の きよぶどうし

一 香頂のものゆのり香屋の目つらぬいぶの 香頂 香頂をた

幅二尺四寸 一 何れも先屏風 言サウラ ことす大守 こと三人 ぶ

勝十年風 一 藁子屏風 本板 寸法 一 甚す寸法

一 写柳 / 体系 丸書 寸法 短葉 竹葉 本焼

掛焼 寸法 大 大守 寸法 大守 寸法



羽

一 大日 大日 寸法 大日 寸法 大日 寸法

別の方にも

一 実の寸法

一 何れのものか 足 寸法 足 寸法

一 何れのものか 木 寸法 木 寸法

一 何れのものか 寸法

一 何れのものか 一人 寸法

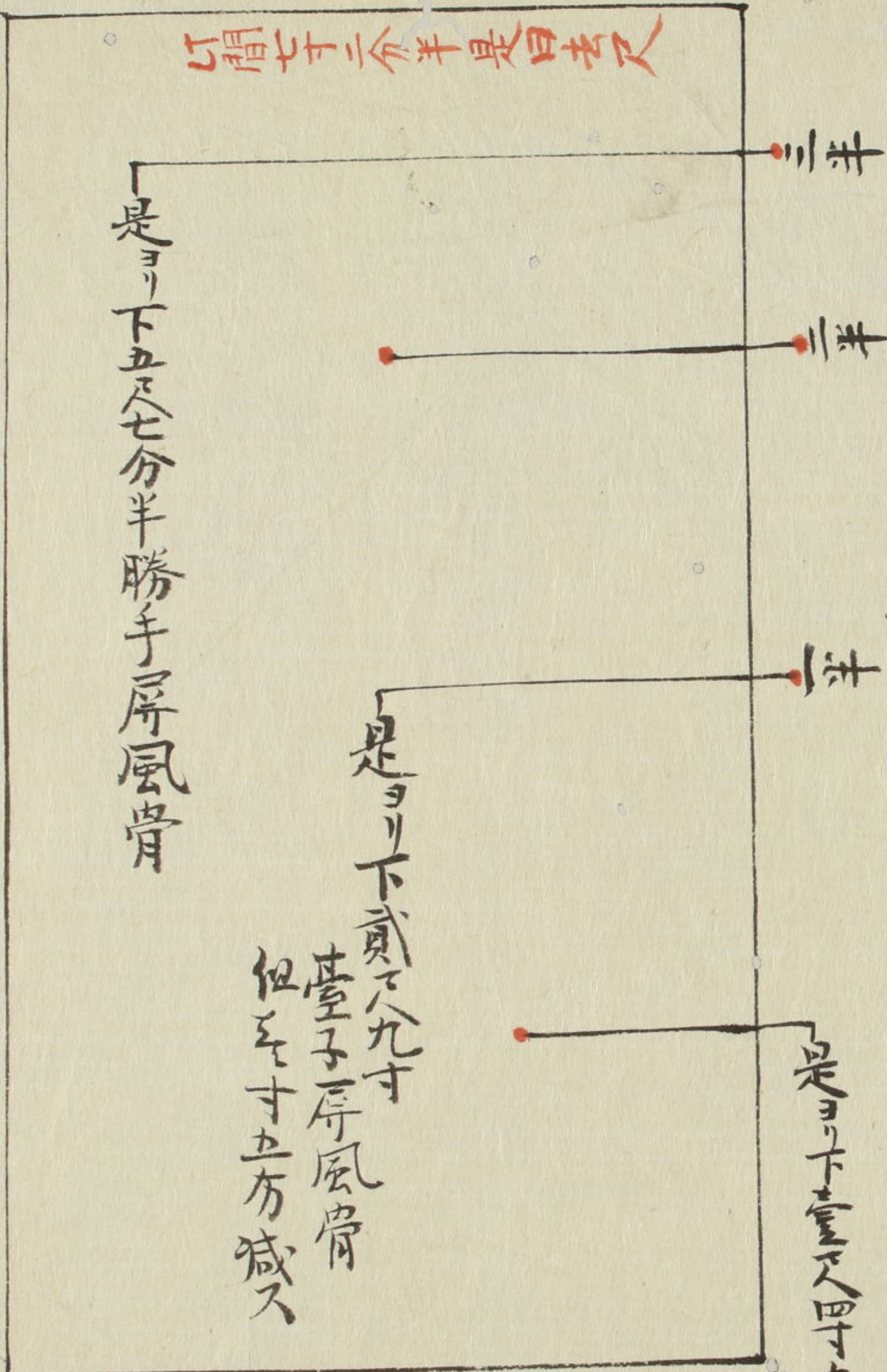
一 火 火 寸法 火 寸法

一 何れのものか 寸法

細川玄首浪花軍記 於 藤原山 東照文 意内好 権寄

何れのものか 何れのものか

古法屏風剖析之圖



是ヨリ下五分半是日去尺

是ヨリ下五分七分半勝手屏風骨

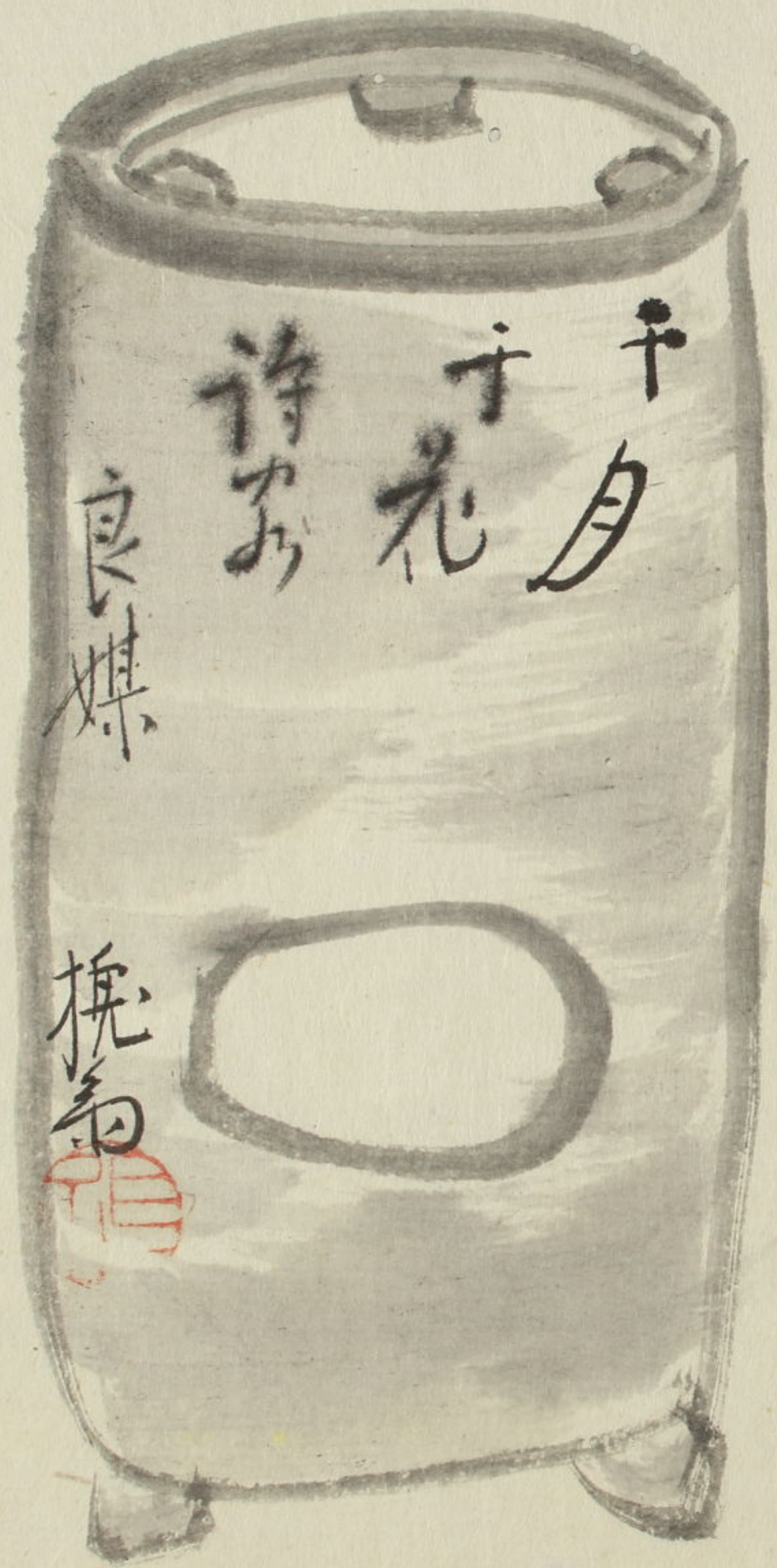
是ヨリ下五分八寸
 是ヨリ下五分八寸
 是ヨリ下五分八寸

是ヨリ下物高五尺八寸勝手大尺風骨但六尺五分上下六分縁二の合三寸

此之古法屏風骨成尺五分者尺
 五分尺骨成尺五分五分五分五分
 又五分骨成尺五分五分五分五分
 五分五分五分五分五分五分五分

風骨骨
 但縁外ナリ

一歲同光全煎茗



携着



良媒

十月
花月
詩家

一盤實主絶塵臺

吉亭無極併題



くみおも

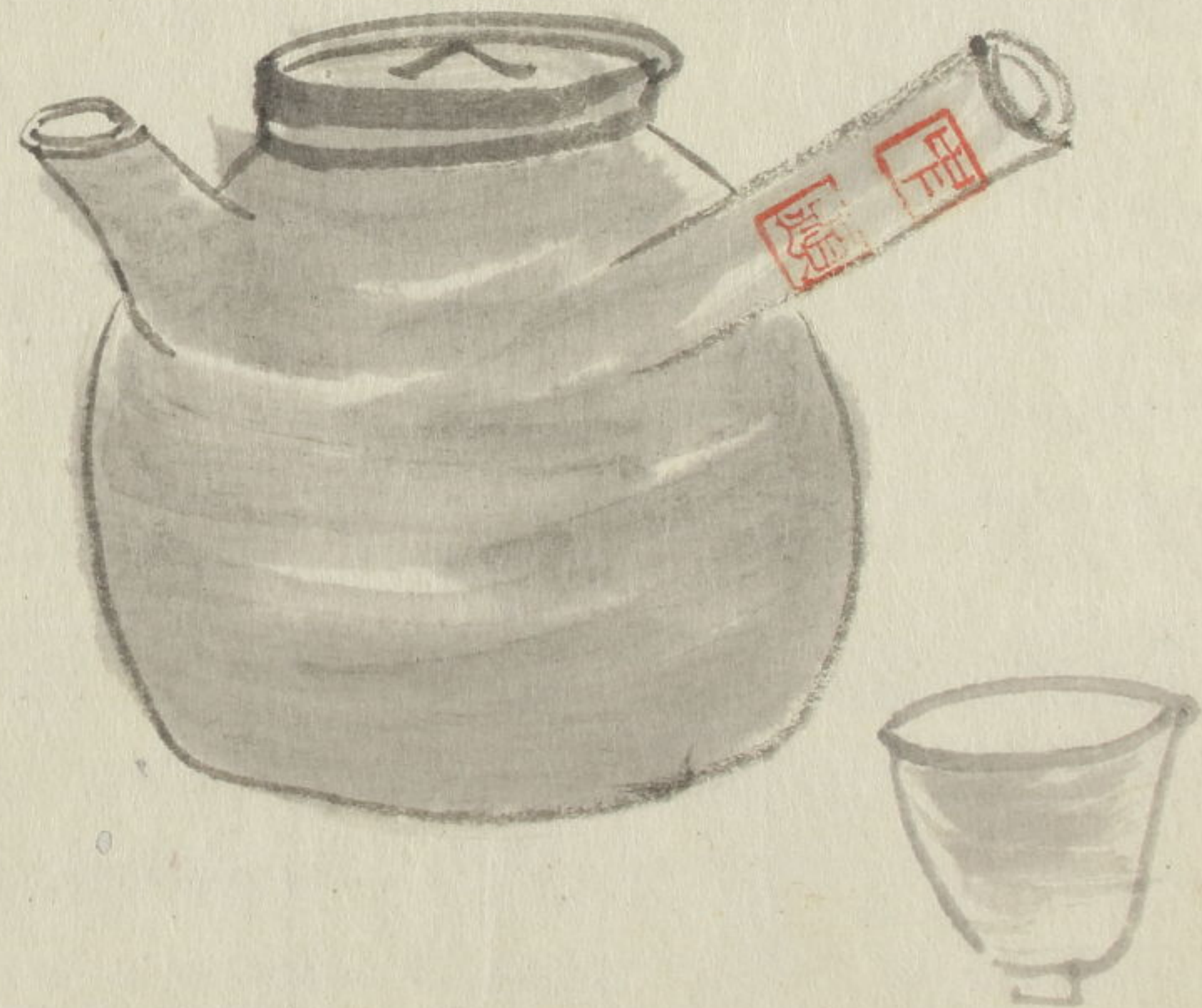
茶のゆきおき

一入法

くまをきす

茶乃

比呂



日高丈五睡正濃軍將扣門驚周公只傳諫議送書信
白箱斜封三道印閑緘宛見諫議面首閱月團三百片
聞道新年入衮執事驚動春風起天子須嘗陽
羨茶百竹不敢先開花仁風暗結珠蓓蕾先春抽出黃
金芽摘鮮焙芳旋封果至精玉好且不吝者至尊之餘
合王公何事便到人家柴門及闌無俗客紗帽籠頭
目前喫碧雲引風吹不斷白花浮香凝碗面一碗唯啣
潤二碗破孤悶三碗搜括腸惟有文字五千卷四碗發輕
汗平生不平事盡向毛孔散五碗肌骨清六碗通仙

靈七碗喫不得也唯覺兩腋羽清風生蓬萊山在何處
玉川子乘此清風欲歸去山之群仙司下土地之清高隔風
雨安得知百萬億蒼生何命隨顛崖受辛苦便從諫
議問蒼生到頭合得稱息否上虛全茶歌

甲申年秋八月開桂花日書於：峰：：堂是：君
之囑也



春風小棹三升酒
寒食深爐一碗茶

長壽仙九榭齋題



茶趣引幽
茶開招韻人

八橋



